

解熱剤アスピリン 大腸がん予防なるか

私たちに身近なあの薬はがん予防の救世主となるのか。解熱鎮痛剤として使われる「アスピリン」を継続的に服用することで、大腸がん化の恐れがあるポリープを抑制できるかどうかを検証する臨床試験が、大詰めを迎えている。既に希少疾患を対象にした試験で安全性と有効性が一定レベル確認されており、研究チームを主導する京都府立医科大の武藤倫弘教授（分子標的予防医学）は「実用化されれば、がん対策の柱を現行の『治療』から『予防』へと転換させる起爆剤になり得る」と期待を寄せる。（岸本鉄平）

大腸がんで死亡する日本人は近年増加し、2020年はがんの部位別死亡者数でワースト2位となる5万1778人（国立がん研究センター調べ）に達するなど対応が急務となっている。府立医大の武藤教授や石川秀樹特任教授らは、10年代からアスピリンのがん予防効果を確かめる臨床試験に取り組んできた。臨床試験の対象は、国内に約7千人の患者がいるとされる家族性大腸腺腫症（FAP）。大腸がんになるリスクが極めて高い遺伝性疾患で、大腸の粘膜に100個以上のポリープができる。20歳前後で大腸を全摘出することが唯一の治療法とされ、患者負担の大きさが課題となっている。

府立医大 臨床試験大詰め

ポリープ抑制 30年までの薬事承認目指す



アスピリンを用いて大腸ポリープ増大を予防する臨床試験を行っている武藤教授（京都府立医科大）

FAP患者らもアスピリンを用いた臨床試験の行方に関心を寄せる。患者や家族でつくる「ハーモニー・ライン」（大阪府泉大津市）代表の土井悟さん（73）は40代で大腸に2600個以上のポリープができていたのが分かり、すぐに大腸を全摘出した。手術後は排便回数が増え、ひどい脱水症状に苦しめられる事態も頻発。病気や術後の苦勞を周囲に理解してもらえず、

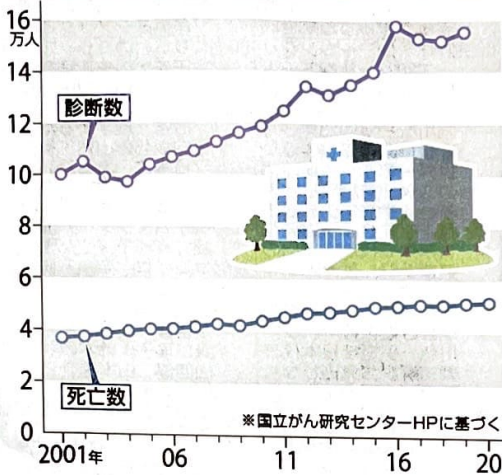
生活の質向上つながる

患者や家族ら期待

職場などでつらい思いを繰り返した。

土井さんは「FAPは大腸を全摘出する以外に根本治療がない病気。もしもアスピリンでポリープの発生を抑制することができれば、患者の大腸を今よりも長く温存できる可能性が広がる。生活の質を向上させることにつながり、自分としては夢のような話」と語る。

大腸がんの診断数と死亡数の推移



武藤教授らは、大腸の炎症がポリープのがん化過程を促進するメカニズムに着目。臨床試験では、FAP患者に炎症を抑える低用量アスピリン腸溶剤を服用し

最終段階となる3回目の臨床試験は今夏、保険診療との併用が可能な「先進医療B」の枠組みでスタートした。対象は内視鏡を使つて5mm以上のポリープを全摘出したFAP患者200人。低用量アスピリン腸溶剤を1日1錠、2年間服用してもらい、8カ月目、1年4カ月目、2年目に大腸内視鏡検査を行つてポリープの発生具合を観察する。

武藤教授は「FAPも一般的な大腸がんも発がんメカニズムはほぼ同じ」とした上で、「アスピリンの服用が推奨される人口は非常に多いとも考えられる。アスピリンが国内初のがん予防薬として承認されれば、がん予防というフロンティアに参入する企業や研究機関は増えるはず。学術、医療経済の両面で世界をけん引する効果が見込めるのではないかと話す。

グループは、2003年までの薬事承認を目指している。臨床試験では医師処方の方の薬剤が使用されており、「市販薬とは成分が異なるため、自己判断での服用は絶対によめてほしい」と呼びかけている。

増え、大腸ポリープの増大をどれだけ防ぐことができるか検証した。臨床試験は既に2回行われた。約100人が8カ月間参加した2回目の試験では、服用した人は服用していない人に比べて大腸ポリープの増大が約6割抑えられた。出血やアレルギーといった副作用が懸念されたが、重篤な影響は確認されなかった。

武藤教授は「FAPも一般的な大腸がんも発がんメカニズムはほぼ同じ」とした上で、「アスピリンの服用が推奨される人口は非常に多いとも考えられる。アスピリンが国内初のがん予防薬として承認されれば、がん予防というフロンティアに参入する企業や研究機関は増えるはず。学術、医療経済の両面で世界をけん引する効果が見込めるのではないかと話す。

「FAP」の枠組みでスタートした。対象は内視鏡を使つて5mm以上のポリープを全摘出したFAP患者200人。低用量アスピリン腸溶剤を1日1錠、2年間服用してもらい、8カ月目、1年4カ月目、2年目に大腸内視鏡検査を行つてポリープの発生具合を観察する。